
ソバニイテ ~ 番外 ~

micky

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソバニイテゝ番外

【Nコード】

N1231B

【作者名】

m i c k y

【あらすじ】

今度は所変わって平次と和葉の話です。まあこの2人だからあまり進展は期待できないか？

（前書き）

平次と和葉を書いてみました。

帰り道。

誰もが恋人にみえるこの2人もまたまだまだな関係。

「なんやて。付き合う事になったて・・・今頃何言うとんじゃ」

「「愛している」って言われたんやて。羨ましいわあ・・・」

先日の事を蘭からのメールで知り、平次に嬉しそうに報告をしている和葉を

平次はチラツとみた。目が合いそうになりサツとそらしながら

「せやけど「愛している」なんて気障やのう工藤のやつ。」

「ええやん。工藤くんだから似合うんよ。ええなあ、私も誰かに言うてもらいたいわ」

「あほう。誰がこんな女に告白なんぞするかい」

ちよつと想像すると気恥ずかしくなり、目の前のポニーテールを軽く引つ張った。

「あゝもう、せつかくさつき結い直したのに。」

そんなじゃれあいをしながら歩いていると、

「和葉ちゃん？」

あれは府警の刑事やんけ。

「あれ？今日は父ちゃん居ませんけど？」

若い新米の刑事は参ったなと頭をかきながら

「本当？一応約束はあるんだけど」

「ほな、うちに上がって待っててもらってもかまいませんけど・・・」

「

和葉がその刑事に笑顔を向ける。

「それはありがたい。じゃあ、お邪魔させて・・・」

「和葉！」

急に大声を出されて驚いて振り向くと不機嫌そうな平次が

「俺も喉沸いたわ。俺にも茶だせや」

和葉は首をかしげ

「平次の家近いんやから自分ちで飲みいや」

「俺は今飲みたいいんや!」

「なんなん?・・・まあええけど」

若い刑事は2人の会話に割って入る。

「えっ・・・と。君たちは恋人同士なの?」
すると2人は

「誰がこんなじゃじゃ馬!」

「ないない、ありえへん!」

2人の微妙な関係を知り

「そうか、良かった。じゃあ、和葉ちゃん僕と付き合ってくれない?」

「へえ?」

機嫌悪さが増していく平次が

「あんた物好きやのう。なんでこんなのが・・・」

「君知らないんだ。和葉ちゃんは若い刑事の中じゃアイドル的存在なんだよ?」

「アイドル・・・って・・・」

「もし付き合えたら俺みんなに自慢しまくるね。あつ!でも君関係ないんだよね」

「・・・」

短い沈黙を破ったのは和葉だった。

「あの!私は誰とも付き合わへんし・・・それに・・・好きな人が・・・おる」

泣きそうな和葉に若い刑事は

「そうなんだ・・・残念だな・・・あつとそろそろ戻らないと。」

また電話するってお父さんに伝えてもらっていい?」

和葉はコクリと頷いた。

平次は固まったままだった。

「和葉に好きな奴がいる」

平次は全く検討がつかず、若い刑事が去った後も立ち止まったままだった。

「平次どないしたん？」

「・・・」

「なあ、へい・・・！」

いきなり手首を掴まれ引き寄せられた。

「誰や？」

「はあ？」

「その・・・お前の好きな奴って・・・」

真剣な眼差しに和葉は目をそらせなかった

「・・・おしえへん・・・」

「はあ？」

「せやから、平次にだけは絶対おしえへん！」

平次から逃げるように和葉は家へと急いだ。

自分の部屋でベッドに横になっていると
携帯がなった。

（なんや工藤か・・・）

「もしもし。俺や・・・知つとる。和葉に聞いた。なあ、
工藤。好きな女に好きな奴がいたら俺はどないしたらいいんやろ？」
「和葉ちゃんに好きな奴がいるのか？」

（なんやこの笑い混じりの言い方は）

「和葉ちゃうで。俺、一言もあいつのこと言っていない・・・」

「そんな事言ってるから迷うんだろ？」

「工藤は姉ちゃんの事に迷いは・・・」

「ないね。絶対。」

（はぁ！さよけ）

「まあ・・・なんだ。頑張れよ」

ツーツー。

「なんじゃそりゃ！！ノロケだけか！！」

PPPPPPメール受信

ー西の名探偵へ。自分の過去へと記憶を辿り、大切な思い出と大事な人をなくさない様に今の自分にきちんと聞かせる事ー

なくさないようにか・・・。

その夜夢をみた。

幼い初恋の少女が見る見る間に大人になり誰かの隣で微笑んでいる。いくら呼んでも声が届かない。

「和葉！」

汗でパジャマがぬれていた。嫌な夢だ。

こんなに苦しいのか。失うという事は・・・。

「呼んだ平次？」

和葉の声に驚き壁にぶち当たった。

「な、なんで、お前人の部屋におんねん」

「なに寝ぼけてるん？今日は日曜で映画見に行くいうてたやろ？今何時思ってたの？」

時計に目をやるとお昼近くだった。昨日考えていたら朝方になってしまったのだ。

「平次、顔色悪いで？今日はやめとこか？」

「いや、大丈夫や。和葉、ちょっとこっちに來い」

「なに？」

素直にこっちにきて俺の前に座った

と同時にキスをした。

「！！」

「一回しか言わんで。よう聞けや」

「愛してるで」

それで君が側にいてくれるなら。

（後書き）

若い刑事「本当は結婚の報告に行ったんだけど、可愛い2人をみてる
とからかいたくなつて」
m i c k y「そうですか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1231b/>

ソバニイテ～番外～

2010年11月17日03時06分発行